

〔現地報告〕

クランタン州におけるポンドックの現状

仲橋源太（広島市立大学大学院）

アラビア語のフンドック「宿」を語源とするポンドック（伝統的イスラーム寄宿学校）は近年近代教育に押されて衰退していると一般的に言われる。

イスラームは生活全般を規定するものであり、ポンドックは近代教育制度が整備される前のマレー社会では主要な教育機関だったが、西欧化の影響で世俗的な学校制度にとって代わられた。マレー人が就職など社会的な要請にも答えなければいけなくなり、ポンドックは敬遠されるようになった。そのため若者に代わり、高齢者が多く住むようになり、現在は福祉的な役割が比重を占めるようになったと言われている。

クランタン州を取り上げた理由は同州に今でも多くのポンドックが存在し、社会に大きな影響を与えているからだ。クランタン州にはポンドックを統括する組織があり、その下に13のポンドックがある。この組織にはクランタン州政権から資金が与えられている。1995年に設立されたが、これは連邦レベルでは野党の汎マレーシア・イスラーム党（PAS）が1990年の総選挙で勝利し、統一マレー人国民組織（UMNO）から州政権を奪還した事と関係がありそうである。州のイスラーム評議会によると、他にも申請されたポンドックが3～4つはある。

クランタン州は、1955年から1959年まではUMNO、1959年から1978年まではPAS（ただし1973年から1977年まではPASが連立与党であるBNのメンバーに加わった）、1978年から1990年まではUMNO、1990年から現在まではPASが統治しているという目まぐるしく政権が変わっている州である。2004年の総選挙でPASは大幅に議席数を減らし、現在かろうじて州政権を維持している状態だ。

クランタン州はその人口約135万人の内、90%以上をマレー系が占める。それ故、UMNOとPASという2大マレー政党によるイスラームを巡る争いが激しい州であり、唯一PASが長期政権を維持している州として多くの研究者に注目されてきた。

しかしながら、政治というマクロな視点を用いるだけでは、このクランタン州の特殊性を説明することは難しく、もっとミクロな視点で見ることが必要がありそうである。先に挙げた様にクランタン州に多く存在するポンドックの存在から、その一面が明らかに出来るのではなかろうか。本稿ではクランタン州のポンドックAで行ったフィールドワークを基に、政治との関係も含めてポンドックの現状を伝

える事を目的とする。

ポンドック A の概要

1954年にできたこのポンドックは設立当初、生徒は男性50人のみであったが、今はその10倍の生徒がいる（女性はその2割程を占める）。また先生やポンドックに住む高齢者などの数も入れると1000人程の大規模なものだ。

ポンドック A での授業はモスクなどで行われ、先生による授業を聞きそれを書き取る形式である。キターブ・クニンと呼ばれジャーウィ（アラビア文字で表記されるマレー語）で書かれている古い本などを教科書として用い、アラビア語、クルアーン、ハディース（預言者ムハンマドの言行を記録したもの）、イスラーム法、イスラーム神学、またスーフィズムというイスラームにおいて内面を重視する思想や運動なども教えられている。例えば毎朝のお祈りの後には、「ラーイラーハイッラッラー」（アッラー以外に神は無し）という言葉で大勢でズィクル（唱念）するが、これはスーフィズムの一形態である。ここでは所謂世俗的な教科は一切教えられていない。

また年齢制限も、試験も、卒業も無く、自分で知識が十分についたと思えば、更なる知識を求めてアラブなどに留学する者もいる様である。

小さい時からこの学校に入る者もいれば、世俗的な授業も行っている私立の宗教学校を卒業して来る者、またクアラルンプールなどの都会で働き、その休暇中にイスラームの勉強のため一週間だけポンドックで学んでいる、という様な者もいる。高齢者も多く滞在しておりまさしく我々がイメージする「学校」という制度には収まらない一つの自立したコミュニティーになっている感じがする。

木造建ての寮は各自1部屋ずつ与えられている。1棟与えられている者もおり、増築したい場合は自ら建て直す。これらには自立性を育てる狙いがあるのだそうだ。

授業料は最初の登録料が10リンギ、毎月5リンギとほとんど無料に近く、入学資格も必要無いポンドックは貧しい子や高齢者の受け皿になっている様である。財源は周辺住民などからの寄付などで賄われている。

先に述べた様にポンドックが社会の底辺を支える福祉センターとして機能している事を指摘する研究はあるが、筆者はそれ以外にもポンドックが生き残っている理由があるのでは無いかと思っている。ポンドック A の生徒の中にはマレーシア政府からの奨学金でイギリスの大学で4年間エンジニアを勉強した後にここに来ている者もいる。この様に見るとポンドックには福祉以外にも人を惹きつける魅力があるのではないか。

クランタン州で政権を握っている PAS はポンドックの保護を訴えるが、それに

は政治的にアピールしたいという事もあるだろうし、実際にどこまで本気で守ろうとしているのか疑問もある。それはこれから調べていかなければいけない大きな課題だと言えるだろう。

預言者ムハンマド生誕祭から見えるポンドック A

去る 3 月 31 日、ポンドック A においては預言者ムハンマド生誕祭（マウリド・ラスールラー）が行われた。ムスリム諸国の中でもこのお祭りが行われる国とそうでない国とに分かれる様である。筆者が今在籍しているマレーシア科学大学（USM）の寮のルームメイトはサウジアラビア人であるが、彼に聞くと母国ではほとんど行われぬと言う。

生誕祭が行われた朝はポンドックの前を約 30 分にわたり、預言者ムハンマドとアッラーを讃える賛美歌を繰り返し歌いながら 500 人程の規模で行進する。これにはポンドック以外の人も参加したようだ。途中からこのポンドックで一番偉いトゥアン・グルと呼ばれる方も参加した。

道路脇では、地元の家族連れ、目以外をトゥドゥンと呼ばれるベールで隠しているムスリマ（女性イスラーム教徒）達などが見物している。道を行進しているのは男性のみである。周りの目がある事もあるが皆誇らしげであった。

この日の前日から翌日にかけて、クンドゥリと呼ばれる東南アジアのムスリム社会で行われている共食儀礼も頻繁に行われる。ここでは 10 人から数 10 人規模の、1 部屋に入れるだけのムスリムが集まり、クルアーンの一部を上手に詠める人が朗読したり先に示した賛美歌が歌われる。これはポンドックの中で行われる事もあれば、外の一般家庭に生徒や先生達が招かれて行われる事もあり、遅い時は夜の 11 時頃から始まり夜中の 1 時過ぎまでである。この行事の最後には決まって食事が賄われる。こうして彼らはお互いの同朋意識を高めていくのであろう。

これが終わると、このポンドックは長期休暇に入り、ほとんどの生徒は実家へ帰って行った。クアラルンプール近郊から来ている生徒が多く、遠くボルネオ島から来ている生徒もいる。家族にここでの思い出を話すのであろう。実際にここで勉強している生徒の多くは、家族からこのポンドックの情報を得て来ているのだ。この様な口伝いの情報の伝達がポンドック A を持続させる要因の 1 つになっていると思われる。

ポンドックのネットワーク

4 月 12 日から 15 日までは預言者ムハンマド生誕祭がスランゴール州のセパンで行われた。マレーシア以外にも南タイ、インドネシア、などのマレー世界からポンドックなどのイスラーム教師が呼ばれており、その生徒なども多く参加した。

またエジプトにある、イスラーム諸学を教える教育機関として権威あるアズハル大学から高名なアラブ人の先生なども講師として呼ばれていた。

ポンドック A から多くの関係者や生徒が参加していた。多くの生徒はスランゴル州出身であるため、帰省中の彼らは容易にここの場所に来る事が出来たようだ。彼らは久しぶりにクランタン州から遠く離れた場所で再会出来た事をお互いに喜び合っていた。

開会式では、マレーシア外務大臣サイド・ハミッド氏が挨拶をする。ポンドックは近代化を阻害する要因として中央政府からは嫌われていると一般に認識されているが、そう単純ではないようだ。総選挙前という事もあり、政治的アピールの狙いがあったとも考えられる。

サイド・ハミッド氏はポンドックを預言者ムハンマドの伝統を受け継ぐ重要なものとして賞賛していた。またポンドックで教科書として用いられているキターブ・クニンの重要性について、それらはオランダのレイデン大学の博物館でコレクションされている程重要だと述べていた。反面、ムスリム達を分断させる団体を非難する、として暗に PAS などのポンドックへの影響を牽制している一面もあった。

これまでポンドック A の現状を見てきたが、単純にポンドックが廃れつつあるとは言えないのではないだろうか。彼らは政治的なイスラームを巡る争いに翻弄されながらもそれをうまく利用する事で生き残ろうとしている様に思われる。加えてセパンで行われた預言者ムハンマド生誕祭で見た様にポンドックは結束する動きも見せている様である。もちろんポンドックの将来については楽観視出来ない。ここで学んだ誰しもがアラブなどに留学しイスラームの先生になれるわけではないだろう。

またクランタン州の特殊性を解明することはこれからの大きな課題である。そのためにはポンドック A 以外のクランタン州のポンドックも観察していく必要があるようだ。

世界中を巻き込む近代化の波は、社会を益々便利にしていると同時に多くの社会問題を引き起こすなど、その負の部分も無視できないと感じる今日、マレー人たちは自分たちのルーツにその解決策を模索している様に感じる。そのルーツの1つとも言えるポンドックの重要性はこれからも変わらないと思われる。